

「からっぽ」この言葉を口にしたとき、思わずニヤリと笑い喜んだ。「これだ これを いただく これを オレの言葉にしよう」とほくそ笑んだ。何でもない言葉、子供のころから使っている言葉、単純で簡単、しかも誰もがわかる、こんな言葉を探していたのですが、ポロリ目の前に転がってきた。「君の言葉は」「座右の銘は何ですか」と問われたことはないが、密かになにかないものか、オレの琴線に触れる言葉はないものかと常々思っていた。難解な言葉、教訓的な言葉、人を驚かすような言葉、そんなものはそぐわないと思っていたので、なかなか浮かんでこなかった。

ビルテール先生もいうが、「われわれの語彙が われわれを誤らせていることに 気付いてもらいたい」東洋の言葉、西洋の言葉、漢字ならその字そのものが持つ意味、ニュアンス、語り継がれてきた意味、それが本当なのか、正解なのか、ちょっと違うのか、全く違うのか、と考えだしたが、こんなことは先生方にまかせよう。単純で、わかりやすく、だれもの気持ちをつかむ、こんな言葉がいいと思う。コマーシャルも、政治のスローガンも、これは同じなんだが。

友人が二十歳代に「カラ（空）」という名の美術団体を作った。日本人なら、「空」という言葉はおぼろげながら知っている。インドや中国伝来の思想、仏教や儒教の中に「空」の教えがあった。「一切の邪念を捨て 心を空にして 物事に挑め」なんて、ヒゲをはやしたおやじ連が、のたまわっていた覚えが多々ある。そのおやじ連もオレも、意味が半分わかったようなつもりで過ごしていたように思う。「空」とは何かと聞かれたら「ぼおっとすることなり」と答えよう「遊」とは何かと聞かれたら「ぼおっとすることなり」と答えようと思っている。「からっぽはいい これからはこれだ」と気に入っている。なかなかこんなふうにはなれない。今のオレ、地位も名誉も金もないのは確かだけれど、「それじゃあげるよ」といわれたら、もろ手を挙げて迎える自分の目が見える。この目が見える限り、侘しいかな、からっぽではない。良寛さんのように何もいらんと乞食ができればすごいと思う。

3,4 回前の項： 荘子の本の中でビルテール先生：我々が熟考するとき、文章を作ったり、語句を考えたり、身体をなすがままさせるために、精神は不在になる。我々はこの身体の「空」に頼ることになる。TV中継で、モーツァルトの曲を歌ったオペラ歌手に「あなたは、舞台へ上がる直前 何をしますか 歌う曲について 考えますか」との問いに「頭を カラにするのです」と歌手は答えた。我々は力が集中できる必要な行動を生み出せるように、自らを空にしなければいけない。何も考えず頭をカラにできないと、繰り返しや硬直、極端な場合には狂気を生むことになる。カラに立ち返る能力は「現実の変容に同化する」「いかなる拘束も受けない」あらゆる状況で正確に行動することを可能にする。

日本人なら幼い子供でも「あなたは この大事な試合にのぞんで」「君は この晴れの舞台を前にして」と問われたら「頭をカラにして・・・」「うまくいって うれしい」ぐらいのことは普通の言葉で話せる。“空”とか“遊”という言葉、単純な字だけれど、俗にいう、深読みをすれば、いくつかの意味、課題が出てくる。オレにとってそんな意味、課題はすでに捨ててしまっていて、この「からっぽ」を大事にしていこう。

ビルテール先生：荘子の文「お前は 心で聞くのではなく お前の 気で 聞きなさい」「なぜなら自身の知覚は 知的でなく 固有の身体の参入だから」これは自身を知覚している本来の活動だから。自らを知覚している。自ら固有の活動は、意識と主観性の土台である。「精神の断食（心齋）」とは、最も純で最も身近な土台に立ち戻ることなのだ。

我々が夢に身をゆだねるとき、放心はなにより身体的なものである。我々は動きを奪われる、ある行動に奉仕する代わりに、われわれの感覚や記憶や想像力が組織され、それらにとって良いと思えるように変化する。生じた空虚において、「道は集まり」我々は「物の始まりの近くで遊ぶ」。では、熟慮するとき、われわれ、話をしているのだろうか。我々が一つの問題に絞り込んだような気がするとき、われわれはひとつの空を作り出している。熟慮しているものの顔を観察すれば、彼は安らぎ、緊張もなく、無表情で、放心している。それを聞いているといっても、耳で聞く代わりに、心で聞いている、心で聞いているというよりは、むしろ身体で聞いている。

ほんとうに河童がいるとは驚き、河童が水の中からこちらを見ている、微笑むかのような顔を見せたのには不気味な喜び、水はあくまでも透明、早い流れに水草が躍る。谷を流れるこの水のほとんどが湧き水だとか、無彩色の川底に若やいだ緑がいい、そこだけが、川面の上だけが涼しい、しばらくたたずむと肌寒くなるぐらいに涼しい。

夜 6:40 出発。京都までVちゃんを迎えに。1時間もあればじゅうぶんだろうとのんびり走った。茨木から電車で行けば京都は30分で行ける近さ、すぐそこ、隣町という感覚だが、それはターミナルのある所だけ、それ以外のところは意外と遠い。まだまだ知らないところがたくさんある京都は道も街もわからない。ナビを頼りに、右へ左へ、ガソリンを入れたり、コンビニに寄ったりしていると1時間以上の時間が過ぎてしまった。京都を出発して、ナビにアカンダナ駐車場をセットすると、“京都東IC”から高速に乗れという指示、“京都南IC”ではないのかと首をかしげながら、久しぶりの再会に話がはずんだ。出発して2時間が経ったので、大津SAで休憩。なんと人の多いこと。夏休み、夜の金曜日、幼児から高校生までたくさんの子供たち、みなさんどこへお出かけですか。

上高地のどこからでも、焼岳がくっきり見える、こんなに全容が見えたのは初めてじゃないかなと思う、今までは曇っていたり、霧がかかっていたりが多かった。中西プロが「40年前 うまく晴れた 焼岳を撮った けっこう売れた」といっていた。この形を上手く撮るとはどういうことだろうと、想像もできない画像に思いをはせながら、山を見た。ボケた目では煙も見えない、人も見えない、土色に赤みのかかった山肌、活火山の炎の名残を思わせる色、焼岳は登ったことがない、また登れる機会があるかもと思いつつ、その山容に畏敬の念をささげた。

上高知バスセンターに近いテント場に絵描きがいる。「あそこで毎年 絵を描いている人がいる 毎年いる もう何度も見た」と仲間がいていた。去年初めて見た。上高地風景の絵を描いている、油画調で極厚塗り、何点か額装して木々の間に飾ってある。穂高あり、焼岳あり、梓川ありだ。どんな奴だとみると、小ざっぱりした老紳士、役人かサラリーマンが小奇麗な普段着でいるという見え方、この方はオレなんかより余程立派な方に見える。彼は夏の間、大きなテントを持ち込み、イーゼルを立て絵を描きながら販売というスタイルらしい。オレは彼のテントをちらりと見て、まわりに散らばる鍋釜、絵の道具など、よほどバンカラな御仁、汚いよれよれの服、垢じみた体躯、髪はザンバラ、という想像とは正反対、オレよりよほど立派で上品な御仁だった。ここで彼の絵の話はよしましょう。

高速道路を走りながら、「去年来たのはいつ頃だった どこで仮眠をとった」と話しながら夜の高速道路を走った。去年は9月に同じような行程で来たそうだが、上高地ではダウンを着ていた。仮眠の場所は「去年もここみたい」と瓢ヶ岳（ふくべ）PAに止まった。ベンチでビール、ライチリキュール、少々のお酒、酔い、眠りについた。

上高地では、まだ午前中だけれど「キャビン 入れますので どうぞ」と部屋へ。キャビンとはいえ、ペンション風の立派な建物、木の柱・梁、白い壁紙。和室、同じ大きさのキッチン、電気、ガス、水道、トイレ、調理道具はレンジがないぐらいか、まずはいきとどいている。シャツ一枚でも汗が流れるような暑さのところからくると、シャツを2枚重ねても調度いい気温は快適。晚餐の材料を冷蔵庫に収納、湯を沸かしコーヒー、昼食のスパゲティを茹で、おにぎりをほおばった。夜はもちろんビールから始まり、すき焼き、ワインへと進んだ。夜の散歩、穂高の途中に灯りが見える、あれは、どこだか、岳沢（だてさわ）の小屋の灯りか。さすがに星が多い、黒紙にパラパラ塩でも撒いたように、無数の星がある。「星が好き もっと見たい」という。オレは、いつも、いつでも見られたのに星は見なかった。テントで寝るとジッパーを開けるだけで満天の星が見える「きれい」「すごい」という声を聴きながら眠っていた。今も昔も「星が好きだ」星たちに語りかける人、月日や時間で星を見分けられる人、星の集まりで形を作って楽しむ人、様々な人たちのその感性に感心するが、オレはいつも眠い。翌朝6時、寝床を抜け出し散策。もうこの時間になればモノノケの気配はとっくに消えている。かすかに霧が立ち、今日も暑くなるぞと予兆の日差しが霧の上に差し込む。よくもあそこまで登ったものだと、われながら感心する穂高連峰が目の前にある。

## 久保俊治著&lt;熊撃ち&gt;

図書館で「ま面白くなかったら読まなくてもいいか」ぐらいの気持ちで借りてきた。まず熊と熊の違い、本では、熊をクマと読ませている、調べてみた。熊とはその仲間全部の総称で、熊・ツキノワグマ・ホッキョクグマ全部が熊の仲間。日本では、北海道の熊が熊で、それ以外の日本の熊はツキノワグマ。著者の久保さん、オレと同年輩。北海道生まれの彼がプロの猟師になり、エゾジカ、熊に挑戦していく。今まで日本古来からのマタギの話、ヨーロッパでの熊撃ちの話、アイヌや北米の話もいくつか読んだが、本人が自身のことを直に語っている、何年かにわたりメモを作っていた、というような意味で迫力のある話になっている。熊はツキノワグマに比べ身体が大きく500キロにもなるものもあるとか。彼らにとって、ヒトも獲物、牛小屋の牛も獲物だという。牛のように大きく力の強いものが獲物だとは驚きだ。オレ自身が登山をするというようなレベルの話ではないねえ。道なき山を駆け巡り、シカやクマを追いかける身体能力という意味でも、胆力という意味でも、オレにはできはしない。“ケモノミチ”何度か間違っ入り込んだことがある。登山道が整備されていない山「ええとこっちか いやこっちにも踏み跡があるぞ」なんていっているうちに、シカやイノシシの踏み跡をたどっていた。ケモノ君たちの身体能力は人間よりずっと上、少々の傾斜、崖、岩場をスイスイ行動しているようで、「これはケモノミチ 恐くて行けない 引き返そう」ということが何度かあった。彼は、雪山で、ひとり何日も、テントやツェルトだけで獲物を追いかける、獲物をしとめたあとは、その肉を食う、そういう世界は「オレにはできない」という意味で感心してしまう、本の内容が素晴らしい。日曜ハンターの父に連れられ、小学生のころには勢子の腕も上げたとか。狩猟期は10月から2月15日まで。10月はカモ・キジバト・シギ、11月はキツネ・タヌキ・リス、12月はウサギ、ライチョウ。獲物はそう簡単には捕れなかったぶん、捕れた喜びは大きかった。当時、ひとつずつ手造りで弾を造る行為に、猟に対する心構えと期待が込められたという。著者の久保さん、今や、TVやマスコミでもかなり有名な方らしい。まだ初心者のころの、はじめての熊撃ちの話を紹介します。

ドキッと胸が高鳴った。もう一度双眼鏡を覗き込む。・ダテカンバの切り株らしい跡がうっすらと雪面に浮き出ている、その根元から足跡が一筋に小さな沢に向かってエドマツとトドマツの大木の点在する中に続いている。・間違いなく熊の足跡だ。穴から出たばかりの跡だ。心臓が高鳴るのがはっきりわかった。ザックをもどかしく背にかつぎ、ライフルを取った。軟らかくて歩きづらい雪の上を走るようにして、遠巻きに沢に向かってシラカバ林の斜面を下った。沢の底に着く。まだ雪をかぶった川から雪解け水で増えた流れの音がゴウゴウと響いてくる。斜面を穴の上方に出る高さまで迂回しながら登る。たわめられていた木が跳ね上がる大きな音に、思わずビクツとしてライフルを構えてしまう。斜面の上に広がる空が、やけに青く雪底の上に見える。シラカバの林が、昇る陽炎の向こうで歪んで見える。やっと穴の上方にたどり着き、静かに近づく。間違いなく熊だ。赤い土が足の形どおり雪の上にクッキリ見える。緊張感で息苦しい。深呼吸をしてライフルを抱えなおす。いつでも薬室に弾を送れる状態で一步、また一步、足元を固めながら近づき、穴の中の気配をうかがう。気配がない。・中を探ってみるがやはり中にはいない。・周囲に充分注意し慎重につけていく。足跡はV字型に切れ込んだ小沢を超えて、太いエゾマツの点在する中に続いている。もう遠くまで逃げてしまったのでは、という思いが焦りに変わり始める。・またモゾモゾ動いた。静かに弾を込め、ライフルを構える。目が薄暗さに慣れてくる。・引き金を引いた。手ごたえがあった。・腹の底まで響く唸り声とともに大きな熊が立ち上がった。毛を逆立て、頭をこちらに向けて伸ばし、両手を持ち上げ気味に垂らしている。唸る声が私の耳の中を震わせ腹の底まで響きわたる。・熊の胸を狙って二弾目を撃ち放つ。・沢の底で雪を掻きむしって転げまわり、怒り唸り吼える。・血の跡を雪につけながら暴れまくる。・無我夢中で三段目を撃つ。緊張と興奮がだんだん熱が冷めるように退いていく。・まだ震えている手でタバコを取り出して、乾いた唇にくわえ、三本目のマッチでやっと火をつける。・熊の腹を開いて内臓を出す。・肝臓から肝を慎重に外し、胆管を紐で縛り、潰れてしまわないように飯盒に入れる。・子供のころからの夢のひとつがかなえることができた。引き金を引くということがいかに重大かということ。・獲物に対して、すべての責任を負うということだ。すべての責任を負う心構えを持って弾を獲物に送り込もう。急所を狙って一発で斃せるように。そう誓いながら、大股でどンドン歩いた。

50歳代、60歳代、奈良県の山をいくつも登った。大峰奥駆道の山もいくつか登っていた。大峰奥駆道という道、修験者が通る道、一本歯の高下駄の役の行者像、石仏、たくさん重ねられた卒塔婆、怪しげな霊を感じる世界、山伏という修験者が徘徊する場所だとは知ってはいた。オレは山に登る、登山をすることが優先で、修験道の人たちの通り道、参拝所、休憩所ぐらいに思っていた。3年前のGWに、キヌさんと吉野から熊野本宮まで、この大峰奥駆道を7日間かけて歩いた、「しんどい つらい おもしろい」という、山の縦走というよりは旅に近い山行だった。その頃は、鉱山の話は全く興味がなく、その道の付近で、鉱山に関係する痕跡、坑道や炉跡などには出くわさなかった、そんなものがあるとも、標識にも資料にも書いていなかった。ただ中央構造線のことは知っていた。関東から、信州を経て、近畿、四国と日本列島を縦断する線、その線上に鉱物資源が眠っている、というぐらいのことは知っていた。

1000年2000年前から日本列島に住んでいた人たちが、石や木や骨を材料にしていた石器時代、次の時代に、銅や鉄を使いだした時期だ。石や木や骨に比べ、性能も加工も数段優れる鉄製品に、憧れの目を向け、自分たちでそれを手に入れたい、自分のモノにしたいという願いがあったはず。時代が進んで、鉄製品の生産加工ができるようになった。今のように、大溶鉱炉で24時間休むことなく、どんどん鉄製品を制作するような規模ではなかったが、武具に、生活用品に、その時代としては大量の鉄が精錬され、製品が造られたと想像できる。そんな制作工程の話、それこそ、どこで、だれが、という基本的な話が見えてこないのは不思議だった。農業、商業のことなら語れる人たちが、鉄の話になると、オレも含めて、話せない、語れない、なぜかなと不思議だった。

若尾五雄著<鬼伝説-金工史の視点から>何年か前からこの関係の本を読みだした。古墳時代前後の鉱山、金属、精錬、製鉄の話だけれど、「修験者は優秀な 鉱山技術者だった」「山伏の人たちが 日本各地の金属のもとになる鉱石を見つけ 掘り 製品にしていた」という本だ。ただ、鬼、鉱山師、修験道というつながりがわからなかった。今まで、聞いたこともない話、「先生の こじつけ話かも」とも思うが、ひとつひとつの話がていねいに調べられている、語られている、というようにやっとなん分かちかけてきた。千年、千五百年前の日本、食料が必要だったように、金属も必要だった。食料や衣料のことは多く語られてきたが、金属のことは、金属製品が博物館に飾られているだけで、材料、加工方法、流通の話になると全く知らなかった。先生の話は下記の神岡鉱山のようにどんどん語られる。

神岡鉱山は最近では公害で有名だが、そのもとの起こりは、この地に鬼ヶ城という山があり、この山を越中の方から越してきた鉱山師が、この鬼ヶ城から銀鉱が出ることを発見したのが、神岡鉱山の始まりだと伝えている。つまり鬼ヶ城という名称と鉱山の関係を如実に示すものであって、吉備津神社の鬼ヶ城と同一の関係にある。鬼ヶ城という名は各地に在って、これらはすべて鉱石の出るところである。

日立金属<たたら話>出雲地方：安来にある。茨城の日立の子会社かな。ここの博物館はぜひ訪れてみたい。

◎たたら製鉄は日本古来、日本独特の製鉄法。たたらとは元来“ふいご”のことを言いますが、踏鞴（たたら）で鉄を吹くことから、鉄の精錬炉のことを鑪（たたら）とも言います。

◎製鉄技術は3000年4000年前に中東で発生、日本には6世紀ぐらいに伝わった。

◎たたら製鉄は中国地方の日本海側で盛んにおこなわれたが、日本刀用の玉鋼は採れたが、量は少なかったのでは。

◎炉の火を守るために、目をやられる人が多かった。火を熾すために、火を吹く、ひょっとこの話が出てくる。

「初日の、籠り期には、朝日の昇る色に吹き、二日目は太陽の日中の色に吹き、最後の日の、下り期には、陽が西山に没する色に吹く」たたら技術者の弁

◎古代でも中国などでは、石炭からコークスを作り、それを使って精錬していたが、日本では、木炭を使っていた。日本では砂鉄がたくさんとれたこと（日本は、ニュージーランド・カナダと共に世界三大砂鉄産地）、樹木の再生能力が優れ、木炭が十分に作れた。一つの炉で年60回操業。消費する木炭は800トン60町歩の山林が必要でした。江戸時代後期、日本の鉄生産の90%を中国地方で生産されていた。

◎麓から見る、山間のあちこちの谷沿いで鉄を治す野だたらの炎が、おろち（妖怪）の舌なめずりに見えたのでは。

水彩・水彩画のことを Water color という。油画を oil といい、水彩を Water というが、100 年前から出てきたアクリル絵の具はどちらに属するのか、オレは描いている本人だけれど、知らない。さて、アトリエの奥のすき間に、自作の水彩画がうず高く積んである、狭い、暑い、入りづらいで、ほおっておいた。「ちょっと整理してみるか 一カ月もあれば かた がつく」ということで始めた。

「いやあ もう三カ月ぐらい経ってしまった 思ったより手ごわい 思ったより悪いものがある 思ったよりいいものがある 思ってもみなかったものがある」日々、水彩画の修繕・整理・撮影に追われている。春ぐらいから、整理を始めた。1980 年後半から～2010 年ぐらいに描いたものがほとんど、若いころは油画ばかりで水彩はない、最近は一カ月、二カ月もあれば簡単に終わると思い、まずは 100 枚 200 枚と出してきた。「おお懐かしい絵」「こいつは素晴らしい こんないい絵があったのか」「これはアカン」「よくもこんなブサイクな絵を描いていたものだ」絵を出し、床一面に広げ、「これは 合格」まずは一目見て納得の絵を積み上げ、「これは アカン」「もう一歩 なんとかならないものか」「力強さが無い」「あまい・・・」気に入らないものを並べ、どう処理するかを考える。紙に水彩なので、水彩絵の具で加筆すると絵が波打ち、ぼこぼこになるが、ぼこぼこを我慢しても筆を入れるほうがいいと思うものは筆を入れていく。もう一つの方法がコラージュ、絵の一部に紙を糊付けする。もう一つの方法が、逆コラージュともいえるやりかた。絵の画面にナイフで大きい穴、小さい穴を開け、裏から紙をあてる。今回はこの逆コラージュが功を奏している場合が多い。

これら水彩画のほとんどが、40 歳代 50 歳代に描いたもの、こんなに量があるとは思わなかった。暇にまかせ、時間にまかせ、描いていた。アトリエがあるおかげ、何枚も絵をひろげ、筆を入れていた。多少資金もあった、彩美堂でモンバルキャンソン紙をロールで買った。1,4M 巾 10M 巻きのその紙を何本も買った。絵の具は透明とガッシュを同じぐらいに使っていた、ホルベイン制が多かった。木製パネル A1～B3 の大きさに何枚も水張りをして描いていた。

ビニール袋に入った絵の束を出してきて床に並べる。おぼろげながら「あんな絵を描いていた・・・」「この絵は展示会に出品した・・・」と覚えている絵もあるが、一番驚いたのは「えええ こんな絵を描いていた・・・」「これは今のオレにとって 素晴らしい絵じゃないか」と思えるもの、そんな絵もたくさん出てきた。当時水彩画を描きながら、描き込まない絵、色の面が 3 色 4 色でピタリ決まれば「これでよし」と筆をおいていた。もちろんそれらの水彩画、色の面が 3 色 4 色でピタリ決まったものは、いまだにうまくいっていると自賛。ところが、ピタリ決まらなかったもの、3 回 4 回の工程で仕上がらなかったものは「ええいこれでもか」「まだまだこれでもか」と加筆している。この加筆が程よく決まっているものがたくさん出てきた。どうにもならないなと思うものもあるが、「程よく熟成し いいじゃないか」とほれほれ眺めるものもたくさん出てきた。描いていた当時は「これらは駄作 描き込みすぎ いずれ棄てよう」ぐらいのつもりで収納していたものだろうが、捨てずによかったと胸なでおろしている。

絵にはサインの横に日付が書いてある。これで何歳のころ、季節はいつ、日もわかる、これは書いておいてよかったと思う。この日付は、30 歳ころ滋賀県大津の西武美術館で見た“ホルスト・ヤンセン展”を見てからこれを書こうと決めた。この画家、日本ではあまり知られていないが、オレが大好きな画家、デッサンがすごい画家なので検索してみてください。

「オレは 抽象画は 描かない」とずっと言っていたのですが、80 年代には何枚かの絵を描いている。それこそ何かを抽象化したというのではなく、面と色だけで抽象画を描いている。そういえば描いていたな、と再発見。さすがに、丸・三角・という類のものはないが、“形”だけをテーマにして描いている。先日、山の地図を調べていたら、そこに<030589 火打山>と書かれていた。1989 年、故阪口さんと火打山に行っている。京都の“中井ギャラリー”で何度か展示会をしていた当時の抽象画群だ。懐かしい絵だ。

旅に出たおり、絵の具を持参して、現場で描いた絵がいくつか出てくる。“釜トンネル”“北岳肩の小屋”とサインの横に書いてある絵があった。ザックをもって歩く姿、ザックをおいて一本取っている姿もある。山へは大きい紙は持っていけないので、アトリエで小さいスケッチをもとに絵におこしたものだが、先代の釜トンネルの風景、もうすぐてっぺんという場所にある北岳肩の小屋で休憩している男女を描いている。

いつもいつも、絵の具をもって行っているわけじゃない、これは今になって残念しごく、「あの時こそ 持っていくべきだった」反省する旅もいくつか思い出す。その反対に、「これはパリ」「これはアメリカ」「これは北海道」と楽しい絵がいくつも出てくる。40 歳ぐらいに行ったアメリカ、ニューヨークの公園、芝生の上で横になって寝そべっていた時の景色、サンフランシスコの海辺の景色、「描いてりゃよかった」と残念なり。ニューヨークとサンフランシスコでは、思い出すのがドラッグのこと。現在のアメリカの法律は知らないが、当時、大麻は合法だったのか、みなさん堂々と煙をふかしていた。夜の街でコカインを買って燻らせていた奴もいた。オレは、酒のみなのがさいわいして、ドラッグなどは欲しくなかった。「酔うと気持ちがいいんだ 酒と同じだ」というが、酒の方が旨いよね。

パリに行ったのは、93年の秋だった。現地で描いた絵には“日付け”と“サインと“paris”と書いている。パリ在住の野口氏を頼っていくつかの画廊まわりをした。「住んでほしい パリ在住なら・・・」「いい絵なので 扱いたいがしばらく居てほしい・・・」という話に始終した。知人の紹介で、ファッションデザイナーの卵氏の部屋に居候した。アクリル絵の具と綿布のナマ生地をもっていった。10号前後の絵を10枚ぐらい描いた。「あ これもそうだったか」というのも隙間から出てきた。ボジョレヌーボーが解禁になった直後にパリに入った。日本ではボジョレヌーボーは、ごたいそうに飲んでいて、ワイン1本2000円というような金を出し、ありがたい酒だ、と敬いながら飲んでいて。ボジョレヌーボーは、新ワイン、今年の新着ワイン、パリのスーパーでは、200円～500円という値段で並んでいた。毎日、昼飯に、晩飯に、1本2本と飲み干した。それ以来ワインは、「あっさり 軽く 飲みやすいものもいい」と決めている。「コクがあり 香りがあり 味が難しい」これらは、高くても、ありがたがらないことにしている。もう一人居候がいた。彼もファッションデザイナーの卵だったが、飲んでいて様子がおかしい。聞いてみると、ゲイだそうで、もちろんターゲットは、オレじゃなく、パリの若いアンちゃんらしい。ファッションの世界、ヘヤーの世界にはこのの方が多そうだ。今でこそゲイの人たちも、その逆の人たちも、世間の風当たりが和らいできているが、当時は犯罪者に近い指のさされよう、みなさん肩身の狭い思いをされていたのでは。その点、入れ墨はいまだにいやだねえ。外国に住み刺青を入れたが、いざ帰国となると、日本では嫌がられる、恐れられる、これは年配者だけの話なのかな。

ふらふらペインティングの旅北海道40日-これはいちばん印象に残っている、楽しい旅だった。10万円也で“ボンゴ君”を買った。今から考えると、よくまああんなポロ車と思える車だったが、それに乗って大阪を出発した。今ならどこで寝る、どこで食料を調達するというようなことに慣れているが、ボンゴ君との旅が、車旅の初めてのこと、不安がいっぱいの旅だった。当時、すでに道の駅があちこちにあったが「あれは土産物屋？」ぐらいに思って近づかなかった。最近はこの道の駅、大いに利用させてもらっている。どこかの誰かがいつも夕方になると車を止め、簡単調理をして晩飯を食っている。軽自動車に犬まで連れて旅をしているというような老夫婦もおられる。

この旅では初日は、JR郡上八幡駅の駐車場でひと晩を過ごした。その後、富山あたりで、故吉谷君を乗せ、新潟港から北海道に向かった。彼、若いころに“原野商法”で買われた北海道の土地を見に行く目的で同道した。まず現地の役所に行くと「また来たか」というような慣れた調子で、縷々説明され「というわけで 何ともなりません」ということだった。その後現場に近づき「このあたりかな」ということで彼は納得していた。広い北海道あちこち転々として絵を描き景色を眺めた。原田君の家にも2泊、竹内君の家にも2泊、ヒゲさんちに1泊、お世話になった。現場でキャンバスや紙をひろげ、その場で描いた絵は、その場の水や空気を吸っているのだから、アトリエで描く絵と違う。

絵の整理をしながら、その時々を思い出し、回顧談になってしまった。図版は北海道の畑。

立松和平著<芭蕉「奥の細道」内なる旅>

いつものことですが、オレは、歌（和歌・俳句）、詩がわからない、味わえない、感じない、という致命傷をだかえつつ、それでも、この紀行文を感じている。書き出しがいい。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を浮かべ、馬の口をとらえて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖（すみか）とす。古人も多く旅に死せるあり。」

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。」

方丈記のこの書き出しもあまりに有名、奥の細道のこのフレーズも心に響く。立松先生の解説が面白い。芭蕉のこの旅を、「修行の旅」俗にして俗に沈まず、聖にして聖に傾かず、一線を残して踏みとどまる位置こそが、言葉によって天地人に語りつくし、究めつくそうという文学者の覚悟なのだ。「ほんまかいな」と思いつつ、道元の言葉「正方眼蔵」の話がたくさん出てきたが、これは次回に。芭蕉が郷里の友人に送った書状の中に。

「去年（こぞ）の旅より魚類香肴味口に払い捨て、一鉢の境涯乞食の身こそ尊けれと、謡に侘びし貴僧の跡もなつかしく、なほ今年の旅はやつしやつして、菰かぶるべき心がけにて御座候。」

◎啄木も庵は破らず夏木立 キツツキ（石川啄木と読みかけた） イオ

◎あやめ草足に結ばん草鞋の緒

◎蚤虱馬の尿する枕もと ノミ シラミ シト

◎夏草や兵どもが夢の跡 ツワモノ

◎閑かさや岩にしみ入る蟬の声

◎五月雨を集めて早し最上川

◎荒海や佐渡に横たふ天の河

立松先生いわく：芭蕉の旅の目的にひとつが、歌枕の地を訪ねる、古歌に詠まれた地を訪ねる、だったそうだ。

◎よもすがら 嵐に波を運ばせて 月を垂れたる 汐越の松 西行作

◎陸奥のいはでしのぶはえぞしらぬかきつくしてよつぼの石ぶみ 新古今：頼朝

◎陸奥の奥ゆかしぞおもほゆ壺の碑そとの浜風 山家集：西行

あの有名な月山登山のところ。46歳の芭蕉、初夏とはいえ、山に慣れない人にはきつい山行と思われます。

八日（6月：今なら7月）、月山（1984M）に登る。木綿（ゆう：辞書には楮の糸と出ているが、鉢巻きなのか、首巻なのか、わからない）しめ身に引きかけ、宝冠（山伏、修験者のかぶりもの）に頭を包み、強力（荷を背負う歩荷じゃなく、山岳ガイドと想像する。当時は、木こり・杣人・炭焼き・猟師と山に詳しい人がたくさんいたと想像できる）といふものに導かれて、雲霧山気の中に氷雪を踏みて登ること八里、さらに日月行道の雲関に入るかと怪しまれ、息絶え身凍えて、頂上に至れば、日没にして月顕る。笹を敷き、蓑を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿（地名：月山の西）に下る。谷のかたはらに鍛冶小屋というあり。この国の鍛冶、霊水を書びて、ここに潔斎して剣を打ち、つひに月山と銘を切つて世に賞せらる。かの龍泉（中国の霊泉）に剣を淬（にら：赤熱した鉄を水に）ぐとかや。干将・莫耶（ばくや：呉の刀工の干将が、王の頼みで剣を作るとき、妻の莫耶の髪を炉に入れてきた二振り **の名をと**したことから、名刀のこと）の昔を慕ふ。道に堪能（かんのう）の執（しふ）あさからぬ事知しられたり。岩に腰掛けてしばしやすらふほどに、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばに開けるあり。降り積む雪の下に埋もれて、春を忘れぬ遅桜の花の心わりなし。炎天の梅花ここにかをるがごとし。行尊僧正（平安時代の天台宗の僧侶で歌人）の歌のあはれもここに思い出でて、なほあはれもまさりておぼゆ。総じてこの山中の微細（みさい）、行者の方式として他言することを禁ず。よりにて筆をとどめてしるさず。

◎雲の峰いくつ崩れて月の山